

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

vol.30 2026年1月28日発行



裾野に立つということ

濱田光佑 (国際リハビリテーション研究会事務局、
愛知医療学院短期大学 理学療法学専攻)

〔卷頭言〕
裾野に立つということ
濱田光佑

〔特集：第9回学術大会〕
石井清志
勝沢香織
河村晃依
國谷昇平

〔コラム〕
〔世界のめがね〕
『駐在と人道支援の間で』
大室和也

〔お知らせ〕

視界がひらけていると、私たちはつい「見えているもの」だけで世界を理解してしまいます。しかし、立ち位置が変われば、見えないものの輪郭が、ふと浮かび上がる瞬間があります。

私はこれまで、国際協力、地域リハビリテーション、教育・研究と、異なる文脈を行き来しながら歩んできました。その都度、自分が「中心にいるのか」「裾野に立っているのか」を問い合わせ続けてきました。その都度、自分が「中心にいるのか」「裾野に立っているのか」を問い合わせ続けてきました。その都度、自分が「中心にいるのか」「裾野に立っているのか」を問い合わせ続けてきました。近年、国際リハビリテーションに関わる多様な実践や研究に触れる中で、現場の一つひとつが、見えない糸で互いにつながっていることを実感しています。制度、文化、専門性の違いはあっても、その根底には「生活を支える」という共通の志があるように思います。

第9回学術大会では、「グローバルヘルスへの挑戦」というテーマのもと、国や領域を越えた実践と知が集まりました。本特集は、その対話の記録であり、読者一人ひとりが自らの立ち位置を見つめ直すための機会でもあります。見えている世界の外側に、もう一つの地平が広がっていることを、本特集から感じ取っていただければ幸いです。

特集：国際リハビリテーション研究会第9回学術大会 『グローバルヘルスへの挑戦』

多職種連携と経験知の継承が拓く未来

石井清志 大会長 (株式会社薬ゼミ情報教育センター
国際事業部)

去る2025年12月14日（日）、JICA地球ひろば（東京都）にて「国際リハビリテーション研究会第9回学術大会」を盛会のうちに開催いたしました。今大会は「グローバルヘルスへの挑戦」をメインテーマに掲げ、リハビリテーションを単なる技術としてではなく、人々の尊厳を守る「グローバルな公共財」として捉え直す機会となりました。

【石井清志 大会長】



【熱気に包まれた会場。「グローバルヘルスへの挑戦」をテーマに議論が交わされた】

シンポジウムでは、ウクライナでの人道支援、モンゴルでの学術連携、そしてキルギス・ウズベキスタンにおける日本式リハビリテーションの展開など、世界各地の最前線からの報告が相次ぎました。特に、世界的な疾病構造の変化の中でリハビリテーション医療のニーズの高まり、災害や紛争、地域開発における複合的な課題へのリハビリテーション専門職の視点の重要性が提起され参加者に新たな視座をもたらしました。

一般演題では、アジアから南米まで幅広い地域での活動報告が行われ、若手からベテランまで世代を超えた「経験知の継承」と交流が実現しました。日本の国際協力は一方的な技術移転から、現地の文化や制度に寄り添い共に創り上げる「協働的知識創造」のフェーズへと深化しています。本大会で得られた知見が、今後の活動の礎となることを確信しております。ご登壇いただいた講師の皆様、そして大会を盛り上げてくださった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。



【多職種・多世代が交わり、活発な意見交換が行われた】

『チュニジアとキルギスでのリハビリテーション』



【勝沢香織 氏】

勝沢香織
(川越リハビリテーション病院)

皆さん、こんにちは。作業療法士の勝沢香織と申します。私は2023年から2年間、JICA海外協力隊員としてチュニジアの肢体不自由者協会で活動しました。帰国後は医療法人瑞穂会に入職し、キルギスと日本の病院を半年ごとに行き来しながらリハビリに従事しています。

【チュニジアとキルギス】

国連開発計画が発表する「人間開発報告書」にある人間開発指数（Human Development Report、略称HDR）は、人間開発の主要な側面、健康寿命・知識へのアクセス・人間らしい生活水準の3つの観点から、各国の生活の質を評価する指標です。

2023年の発表によれば、193の国と地域の中でチュニジアは105位。キルギスは117位です。共に開発途上国ですが、首都に暮らしている限りでは日本の生活水準と大きな違いを感じません。けれども一方で、国民誰もが必要な医療サービスを受けられる日本の「安心」は得難いものなのだと実感します。

【チュニジアでの作業療法】

配属先の肢体不自由者協会は、身体障害者や知的障害者及び重複障害者を支援するNGOで利用者のほとんどは脳性麻痺です。アテトーゼ型脳性麻痺の方から「自分でFacebookやMessengerをしたい」と希望があり、彼らとスイッチを使った入力手段を試し、練習を重ねました。数か月を経て、スマートフォンで写真を撮ったり、Facebookで好きな記事を探して見たり、Messengerでスタンプや音声メッセージを送れるようになったアテトーゼ型をお持ちのおふたり。同僚の言語聴覚士が話してくれました。「彼らは今まで、ここに来ても何もできることなく、ただ来て居て帰るだけだった。だからFacebookやMessengerができるようになってとても喜んでいる。彼らの生活は変わった」。未だ普及していない技術と機器の導入を叶えたのは、当事者・ご家族の喜びと、彼らの喜びに価値を置く同僚が在ったからだと思っています。

【キルギスでのリハビリテーション】

リハビリが普及していないキルギス。Cortex医療センターと共に開設した日本式リハビリテーション病棟には、主に脳卒中の患者さん他、脊髄損傷、脳性麻痺、神経難病をお持ちの方なども訪れます。患者さんの病期は様々ですが、歩行の再建・回復を望まれる方が殆どで〈リハビリ＝機能回復〉であり、例えば車いすでADLが自立する等のような〈生活再建〉まで関わっています。時間的に、そして心理的にもです。たとえ脳卒中発症から数年を経ていても、機能回復はある。けれどもそれが患者さんにとって意味のある変化、生活の変化を及ぼす程度には至らないことはあります。日本では何となくそういうものとして代替手段に転じていた機能回復の行き詰まりを「本当にそうなのか、最善を尽くせているのか？」と、リハビリが当たり前ではないこの国では自問します。片手動作での着衣訓練などを患者さんやご家族から「不要」と言われると、自分が日本で行ってきたリハビリにセラピストとしてのエゴはなかっただろうか？と思うのです。自分の作業療法を再考すると共に、リハビリテーションが、装具や道具などの物、バリアフリーなどの環境、障害者福祉制度そして社会的態度と共に成されることを、キルギスで実感しています。



【キルギス：リハビリテーションの様子】

『アカデミアと国際交流～モンゴルから見える未来～』 ～話題提供者として～



【マンダルゴビにおける調査研究メンバー、
河村氏は前列右から3番目】

河村晃依
(北里大学医療衛生学部)

本学術大会では、モンゴル国立医科大学のYanjinsuren Batbayar先生（通称：ヤンジカ先生）、福島県立医科大学の高橋恵里先生と共に発表の機会をいただきました。ヤンジカ先生からは「モンゴルの高齢化、医療・リハビリテーションの現状」、高橋先生からは「本プロジェクトの概要」についてご報告があり、私は今年度の成果として「モンゴル語版生きがい意識尺度の開発」について発表しました。

発表後の意見交換では、モンゴルの都市部と地方における生活様式の違いや、高齢者の生活機能への影響について議論が交わされました。特に、サンプリングや年齢設定を

含め、今後の調査分析における精査の必要性が共有されました。また、翻訳作業に関しては、日本の外国人支援の現場とも共通する課題があることが指摘され、新たな示唆を得ました。

本プロジェクトは人と人の縁から始まり、未開な部分も多い中、「分からないからこそ話し合う」をモットーに、日蒙両国の仲間と協働しながら進めています。最終的な使命は、モンゴルと日本の双方にとって、実践的かつアカデミックに意義ある成果を生み出すことです。高齢化が進展するモンゴルと、超高齢社会である日本が互いの実践・研究に活かせることを目指し、3年目となる現在は、モンゴル高齢者の生活機能を理解するための体制づくりに注力しています。

私は、今井らによる生きがい意識尺度（Ikigai-9）のモンゴル語翻訳版作成に携わっており、健康を多面的に捉える実践的な評価表を、信頼性・妥当性のある形で世に出すことを目指しています。翻訳作業は単なる言葉の置き換えではなく、文化・社会に根差した概念であることを実感しながら、国際・多職種チームで慎重に作業を進めています。完成を皆さんにお知らせできる日も、着実に近づいております。

本大会には初参加でしたが、かつて同じ地（パキスタン）で苦楽を共にした仲間にも再会し、当時の景色がふと蘇るとともに、それぞれの立場で前に進む姿から大きな勇気をもらいました。大会の準備・運営に携わった皆さんに、心より感謝申し上げます。

『国際リハビリテーション研究会第9回学術大会』 ～演題発表を振り返って～



【國谷昇平 氏】

國谷 昇平

(NPO法人Rehab-Care for ASIA代表)

2025年12月14日、国際リハビリテーション研究会第9回学術大会において、「タイ地方部の高齢者介護における負担感とソーシャルネットワークとの関連性」という演題で発表しました。内容としては、タイ地方部に居住する介護が必要な高齢者約300名とその介護者300名を対象に、年齢、性別、既往歴などの基本情報およびアンケート調査を実施し、その結果を報告しました。

発表時の質疑応答では、タイに関わりのある理学療法士および作業療法士から質問をいただきました。質問内容は、地方部と都市部における高齢者の違いや、地域で暮らすタイの高齢者の生活の様子などについてでした。私自身、これまでにもいくつかの場でタイの高齢者について発表する機会はありましたが、今回のように現地の高齢者をよく理解しているセラピストから質問を受けたのは初めてであり、新たな視点に気づくきっかけとなりました。聴講者だけでなく座長も含めてアットホームな雰囲気であり、リラックスした気持ちで発表に臨むことができました。

また、本研究会での発表は今回が初めてでしたが、発表後には久しぶりにお会いした方々と、海外におけるリハビリテーション事情について情報交換を行うことができ、なぜもっと早くこの研究会で発表しなかったのだろうかと後悔したほどでした。

タイの高齢者との関わりは、青年海外協力隊時代を含めて10年が経過しましたが、本発表を通して、今後もその関わりを継続していきたいという気持ちを新たにすることができました。貴重な機会をいただきありがとうございました。

特別写真：国際リハビリテーション研究会第9回学術大会



【災害支援とりハビリテーション】
～レジリエントな社会を築く～林寿江 氏



【中央アジアにおける日本式リハビリテーションの展開】
～キルギスの現場からウズベクの教育協力まで～



【一般演題：長田真弥 氏】
パラグアイの理学療法士養成校における学習プロセスの省察的検討—JOCVの活動実践から—



【一般演題：高橋佳太郎 氏】
チリ共和国テムコ市の外来リハビリテーション患者における生活空間と身体機能・動作能力の関係

「コラム」『世界のめがね』 大室和也 ～駐在と人道支援の間で～ (AAR Japan 難民を助ける会)



【カンボジアより】

石の上にも三年。私はこの言葉に反した生き方をしていると思っていました。大学院に2年、病院に2年、協力隊に2年。少し後ろめたさすらありました。そんな私がカンボジアに来て早2年半。2年の壁は突破しましたが、カンボジアは10年までは新人扱い。まだまだ道のりは長そうです。

話は変わって先日、タイ・カンボジア国境での軍事衝突が発生し、両国で一時100万人近くの人々が避難を強いられました。この事態をうけAARも緊急支援を開始し、避難所に生活必需品を提供しました。

緊急支援に携わる者として「人道原則」を忘れてはなりません。人道支援は、人道、公平、中立、独立の4原則を遵守し実施します。

しかし今回、困ったことに直面しています。私はいつもカンボジアの人たちに世話をなっている「新人」の身であるため、支援活動中、完全に中立でいられるだろうか。タイのことを非難する気持ちをもってしまっていないか。心が偏っている状態で、公平な視点をもって活動を進められるのか。カンボジアの人たちの感情をどう受け止めたらよいか。今も悩む毎日です。

一刻でも早く平穏な時間が戻ってきますよう。まずは三年、続くことを祈って。

[お知らせ]

【国際リハビリテーション学第8巻郵送予定】

2026年2月に会員の皆様全員に「国際リハビリテーション学第8巻」を冊子体で郵送いたします。未着の方は事務局までご連絡ください。

【年会費お支払いのお願い】

2025年度の年会費のお支払いがお済みでない方は、下記の口座まで年会費のご入金をお願いいたします。銀行名：ゆうちょ銀行 口座名義：国際リハビリテーション研究会 記号：10540番号：83410731

他金融機関から振り込む場合 店名：0五八（ゼロゴハチ） 店番：058 預金種目：普通預金口座番号：8341073

※振込者名と会員名を同じにしてください。

編集後記

- 本号で取り上げた国際リハ学会2025では、各発表者が地域や現場で積み重ねてきた実践をもとに議論が交わされ、互いの取り組みを尊重し合う温かな雰囲気が印象的でした。実践ベースの発表も多く、研究が現場とつながっていることを実感する場でもありました。私自身もシンポジストとして参加し、本学会が今後の実践や研究をつなぐ重要な場であることを改めて認識しました。（大西海斗）
- 「早く行きたければ一人で、遠くまで行きたければ仲間と行け」—志を同じくする仲間たちと一堂に会し、これまでの歩みを振り返り、ときに内省しながら、次への一步を模索する貴重な時間となったことと思います。来年度、国際リハ研究会の皆さんとどこまで歩みを進めていけるのか、そしてその先に控える一年後の学術大会が今から大変楽しみです。（佐久間善子）

事務局 編集担当

大西 海斗（フリーランス）

長田 真弥（株式会社メディファーレ）

佐久間 善子（London School of Hygiene and Tropical Medicine）

高橋 恵里（福島県立医科大学保健科学部）

高橋 佳太郎（JICA海外協力隊、チリ派遣）

寺村 晃（大阪保健医療大学）

成田 徹平（東北大学病院）

濱田 光佑（愛知医療学院短期大学）

古川 雅一（薬ゼミ情報教育センター）

三田村 徳（東北医科大学病院）

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局

jsir.office@int-rehabil.jp

JSIR HP

